

「置き去りの歴史が生んだ勤労と屈辱の感覚」

井手 英策 先生

やや早口の講義ではありましたが、お話の言葉一つ一つが、日頃のソーシャルワークの立ち位置を問い直すような言葉に聴こえ、聴き漏らさないよう、3回視聴しました。おかげ様で先生の語録メモもバッチリです。いくつか、自分的に印象に残ったフレーズを拾い上げてみようと思います。

「そげな恥ずかしかお金は一銭ももろとらん」という言葉が、先生の政治哲学の根本、「助けられることを屈辱とってしまう社会から目をそらしてはいけない」、「運が悪いというだけで、将来を諦めなければならない世の中を絶対に許さない」、「増税は格差を小さくする」、「公とコモンの両輪で、運が悪かったと穴に落ちるような世の中をなくし、より良い生の保障を目指す」などのお話を聴き、最後の質疑応答でも、「増税しないなら、増税しないことで、どんな社会になるか語ってほしい、それせずして、ただ反対ではこれからの子どもたちに対してあまりにも無責任」、「信じられないなら、信じられるように知恵を絞るべき」、そして、私は公務員ですので、「できない理由を並べるだけで、どうすればできるかを考えようとしなさい」という言葉も耳痛く、闘志に繋がりました。

「コミュニティの作り方」という質問にお答えになられた中身は、大変興味深く、参考になりました。

先生は、市民対象の勉強会をボランティアでされていて、狙いは、公務員を巻き込むこととお話されておられました。「公務員自身が特定の人を集めて会うと差別になってしまうので、彼らにはできないんです。だから、場を作って公務員を呼ぶんです」と。

先生が市民と公務員のつなぎ役を果たされ、「公務員が徐々に地域の取組や人を知ることにより、ケアタウン構想の有機的なプランが出てくる」というお話は、とても共感が持てます。と同時に、数年前の自分の苦い経験(高齢部門)と対比して、何が足りなかったのか気づく手がかりになりそうです。結局は異動という形で、熱心な市民の方々と縁が切れ、勢いも減速してしまった形となりましたが、自分が保健師と言えど、行政の人間だったからかなとお話を聴きながら思うと同時に、動きにくさがあるなと感じました。

今まで、普通に耳にしていた「勤労」という言葉の背景に、歴史上の刷り込みがなされ、「働かざる者食うべからず」的潜在意識が、「屈辱」という形で、日本には根強く残っていることを認識しました。感覚を研ぎ澄まし、今後のソーシャルワーク活動に活かして参りたいと思います。

わかりやすく、熱く、語っていただき、ありがとうございました。